

命を削り公約守り抜く

写真は8月8日の沖縄タイムス号外。沖縄タイムス+プラスのサイトから、翁長雄志知事急逝と題した9日標題社説の前半を紹介する。

翁長雄志知事が8日夕、膵臓がんのため、入院中の浦添市内の病院で急逝した。67歳だった。

そのわずか1時間半ほど前、謝花喜一郎副知事が県庁で記者会見し、知事の職務代理を置くことを発表したが、あまりにも突然の訃報というしかない。

翁長知事は4月に膵臓の腫瘍の摘出手術を受け、ステージ2の膵臓がんだったことを公表していた。5月に退院した後は、抗がん剤治療を受けながら県議会や慰霊の日の式典など公務をこなしてきた。しかし新基地建設を巡り埋め立て承認撤回を表明した7月27日の会見以降、公の場には姿を見せなかった。がんは肝臓にも転移し、7月30日に再入院していたという。

糸満市摩文仁で開かれた慰霊の日の沖縄全戦没者追悼式で、知事は直前までかぶっていた帽子を脱ぎ、安倍晋三首相を前にして、声を振り絞って平和宣言を読み上げた。

「新基地を造らせないという私の決意は県民とともにあり、これからもみじんも揺らぐことはありません」

翁長知事は在任中の4年間、安倍政権にいじめ抜かれたが、この姿勢が揺らぐことはなかった。安易な妥協を拒否し、理不尽な基地政策にあらがい続ける姿勢は、国際的にも大きな反響をよんだ。

知事は文字通り命を削るように、辺野古反対を貫き、沖縄の自治と民主主義を守るために政府と対峙し続けたのである。

その功績は末永く後世まで語り継がれるに違いない。心から哀悼の意を表したい。

本当に悲しい知らせである。沖縄県民だけでなく、私たち一人ひとりが問われている。翁長知事が命を削り求めた、沖縄の新基地建設を許していいのかと。

(2018年8月10日)

